

青森製氷株式会社の製氷工場に使われている石材（追補）

島口 天¹⁾

Building Stones Used at the Ice Plant of Aomori Seihyo Co., Ltd (Supplement)

SHIMAGUCHI Takashi

キーワード: 青森製氷, 九艘泊石, 脇野沢安山岩類, 問屋仕込み制度

はじめに

筆者は、青森市にある青森製氷株式会社の製氷工場に使われている石材について調査し、むつ市脇野沢九艘泊で採石された脇野沢安山岩類の火砕石（石材名は九艘泊石）であることを報告した（島口, 2019）。この報告では、採石場跡の特定や運搬方法等について明確な結果は得られていない。

今回、九艘泊地区と、九艘泊－川内間の神社における九艘泊石の利用状況について、2019年5月25日に追加調査を行った（図1）。その結果、島口（2019）を補う成果が得られたのでここに追補する。

1 九艘泊地区の調査

数軒の家の土台および土留に九艘泊石が使われていることを確認した（図2）。また、屋外での煮炊きに使用していると思われる九艘泊石製のカマドも確認した（図3）。

島口（2019）では、脇野沢村史民俗編に「井戸枠の石は近くの山でとれるヤキ石（家屋の土台にも使用される）」といったものを使った」と記載されていることを述べたが、今回の調査で九艘泊石が家の土台に使用されていることが確認されたことから、九艘泊では九艘泊石をヤキ石と呼んでいたと思われる。また、石は地区周辺の山で採石していたことが考えられる。

2 九艘泊－川内間の神社調査

2018年3月31日の調査では、脇野沢小沢の小沢八幡宮で社殿前の土留めと石段に九艘泊石が使われており、1874年（明治7）の社殿建設時に設置されたと考えられた。また、川内町蛸崎の蛸崎八幡宮の石灯籠にも九艘泊石が使われており、慶応年間（1865～1868年）以降の設置と考えられた（島口, 2019）。

今回は、新たに脇野沢八幡宮と川内八幡宮について調査を行ったほか、小沢八幡宮・蛸崎八幡宮についても再調査を行った。その結果、小沢八幡宮からは新たな知見が得られなかったが、その他3個所の神社では九艘泊石の利用状況が確認された。

① 脇野沢八幡宮

社殿に向かって右側奥に日和山チョコマン稲荷神社があり、その石灯籠が九艘泊石製であった（図4）。製作者や奉納者の銘は、読み取ることができなかった。



図1 調査位置図



図2 九艘泊石製の土留（九艘泊地区）



図3 九艘泊石製のカマド（九艘泊地区）

1) 青森県立郷土館 学芸主幹（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

脇野沢村史民俗編によるとこの神社は、創建が1646年（正保3）と伝えられ、当初は藤ノ崎にあって、弁天島（鯛島）に向けて堂が建てられていた。後年、村にコレラが流行した折、そこで死体を火葬にしたため不敬であるとして、山号にあるとおり日和山（現在の愛宕山）に移したという。それが、明治初めには八幡宮境内に遷座されていたようで、最初は社殿に向かって左側の現在、寄付の札場のあるところに堂が建てられていたが、1942年（昭和17）の八幡宮再建の際に現在地に遷座された。

これらのことから石灯籠は、この神社が八幡宮境内に遷座された明治時代初めまたは、現在の場所に遷座された1942年以降に奉納されたことが考えられる。

② 蛸崎八幡宮

境内西側（社殿に向かって左側）の土留に九艘泊石が使われていた（図5）。境内東側の隣家の境にも九艘泊石が並んで埋まっており、西側同様に土留である可能性が高い。これらの土留は、現在の社殿が建てられた1917年（大正6）に設置されたことが考えられる。

③ 川内八幡宮

社殿の土台石の一部が九艘泊石製であった。禰宜の石倉氏によると、現在の社殿が建設されたのは1899年（明治32）であるということから、土台石はその時に設置されたものと考えられる。ただ、当初から土台石の一部だけが九艘泊石であったとは考えにくく、すべて九艘泊石だったか、あるいはすべて九艘泊石でなかったものが、途中で行われた補修等で部分的に入れ替えられ現在に至



図4 九艘泊石製石灯籠（日和山チョコマン稲荷神社）



図5 九艘泊石製の土留（蛸崎八幡宮）



図6 一部に九艘泊石を使っている土台の石段（川内八幡宮）

ると考えられる。

3 九艘泊と青森の関係

脇野沢村史民俗編に記載されている内容をまとめた島口（2019）の内容に加筆し、九艘泊と青森の関係について再度、以下のようにまとめる。

「明治末期から大正初期にかけて、九艘泊の漁業には新しい動きがあった。タラ網漁業者の増加による仕込み親方との関係の強化、そしてイワシ定置網漁業者の出現である。仕込み親方とは「問屋仕込み制度」をもつ魚問屋（仕込み問屋）のことで、この制度は漁業に必要な資金資材の一部または大部分を漁業者に前貸しし、そのかわり漁獲物をすべて安く買い取るというものである。

タラ釣と比較して、タラ網は水揚げを増加させるが、同時にそれは著しい経費の増加でもあり、仕込み親方への依存度も一層高くなった。他方、集落の内部には仕込み親方と密接な関係を持つ者も出てきた。それがいわゆる差配（世話人）であり、集落内部のとりまとめ、仕込み問屋の帳場役を司る者である。

仕込み親方として知り得るのは、脇野沢では杉浦商店、上星、山崎（入中）であり、青森では佐末、若由、福岡商店、本郷などである。地区によって取引問屋が異なる傾向にあり、九艘泊では専ら青森の問屋から仕込みを受けていた。

1915年（大正4）に九艘泊で初めてイワシ定置網を始めた現在の櫛引岩男家の先々代石太郎は、明治末一昭和初年にかけて集落総代を勤めると同時に、若由の世話人だった。また、櫛引福蔵の孫、太助は当初、佐末の元で働き、後に佐末の持っていたイワシ定置網権を譲り受けて自らイワシ網経営に乗り出した。」

青森の仕込み親方の佐末というのは佐藤末吉、若由は若井由五郎のことで、両者とも青森製氷の重役である。つまり、青森製氷重役と九艘泊の漁業者には密接な関係があり、製氷工場等の建物に九艘泊石を利用することにつながったと考えられる。ただ、石材の採石や運搬に関しては、まだ明らかにできていない。

謝 辞

今回の調査では、九艘泊町内会長の櫛引俊光氏、川内神社禰宜の石倉司氏に調査の便宜を図っていただいた。また、むつ市教育委員会の森田賢司氏に協力していただいた。記して厚くお礼申し上げる。

文 献

島口 天（2019）青森製氷株式会社の製氷工場に使われている石材。青森県立郷土館研究紀要、脇野沢村史調査団編（1983）脇野沢村史 民俗編。脇野沢村役場、pp.737.